

ローマ8章14-30節 「神の国に入るまで」

はじめに: 苦しみの中の働き

1A 子としてくださる御霊 14-17

2A 栄光のための苦しみ 18-25

1B 被造物の呻き 18-22

2B 体の贖いの望み 23-25

3A 御霊の執り成し 26-27

4A 父なる神のご計画 28-30

1B 全てを益とされる方 28

2B 御子の形 29-30

はじめに: 苦しみの中の働き

こんばんは。私たちはマラナサ・バイブル・フェローシップのキャンプをして、十数回は少なくとも行っていると思います。そこで、イエス様の再臨を待ち望むことを思いながら、ゆっくりとした時間を過ごすというのが趣旨です。その時から既に、「終わりの日は近い、イエス様は来られます。」ということ、聖書が言っているとおり伝えてきました。けれども、その間に、それがますます現実味を帯びてきました。それが、テレビやネットに出て来る情報として現実味を帯びてきた、ということではなく、自分の身近なところで、いろいろなことを通して、困難があり、躓きそうになることもあります。

パウロが、テモテ第二 3 章にて「困難な時代がくることを、承知していなさい」と言っています。「3:1-5 終わりの日には困難な時代が来ることを、承知していなさい。そのときに人々は、自分だけを愛し、金銭を愛し、大言壮語し、高ぶり、神を冒瀆し、両親に従わず、恩知らずで、汚れた者になります。また、情け知らずで、人と和解せず、中傷し、自制できず、粗野で、善を好まない者になり、人を裏切り、向こう見ずで、思い上がり、神よりも快樂を愛する者になり、見かけは敬虔であっても、敬虔の力を否定する者になります。こういう人たちを避けなさい。」見かけは、敬虔であってもあります。つまり、ここに書いてある自分を愛して、いろいろな悪いことをする人たちが、神を知らない世の人ではなく、神を知っていると知っている人々の間で現れる、ということです。そしてイエス様ご自身が、「多くの人がつまずき、互いに裏切り、憎み合います。…不法がはびこるので、多くの人の愛が冷えます。(マタイ 24:9,11)」とも言われました。

そこで思い出すのは、預言者イザヤです。彼は、ユダとエルサレムで起こっている不法を見て、神の怒りの預言を行いました。それが 1 章から 5 章まで続いています。その時の王はウジヤという人でした。彼は有能な王であり、神を愛していて、良い政治を行っていました。半世紀も、彼が

王だったのです。とても安定していました。ところが彼が死んだ時、その王座が空白になった時に、イザヤは幻を見たのです。天にある王座の幻でした。その聖なる、神々しい姿に彼は圧倒されて、「ああ、私は滅んでしまう。この私は唇の汚れた者で、唇の汚れた民の間に住んでいる。しかも、万軍の主である王をこの目で見ただから。(イザヤ 6:5)」そして主が彼を呼ばれて、預言者としての活動を開始させます。そして主が彼に言われます。「6:9-10「行って、この民に告げよ。『聞き続けよ。だが悟るな。見続けよ。だが知るな』と。この民の心を肥え鈍らせ、その耳を遠くし、その目を固く閉ざせ。彼らがその目で見ること、耳で聞くこと、心で悟ること、立ち返って癒やされることもないように。」つまり、預言のことばに心を硬く閉ざす、厳しい時代になることを話されたのです。案の定、ウジヤの次の次の王がアハズであり、彼がユダの王の中で最も悪い王の一人となりました。

パウロが、宣教旅行で自分自身が石打ちにあった後、それでも立ち上がって福音を宣べ伝えましたが、そこに残された弟子たちに、「使徒 14:22 信仰にしっかりとどまるように勧めて、『私たちは、神の国に入るために、多くの苦しみを経なければならぬ。』と語った。」とあります。神の国に入るという希望が、私たちにあります。しかし、主はそこに至るまでに苦しみを経なければいけないと教えられます。私たちの中に押し迫る苦しみや試練、躓きそうになる誘惑、そういったものにあっても、なおのこと心を強くし、信仰にしっかり留まって、それで神の国に入ることについてお話したいと思います。今晚は、ローマ 8 章 14 節から 30 節を見て行きたいと思います。

1A 子としてくださる御霊 14-17

14 神の御霊に導かれる人はみな、神の子どもです。

私たちが御霊に導かれる生活を歩んでいるならば、その人は神の子どもであるとあります。私たちが神の子どもになるということは、つまり神に似た者になる、また、神に従順な者になるということです。そのために、神が信じる者に初めにしてくださったことは、御霊によって新しく生まれさせてくださったことです。そして神はまた、私たちを養子縁組にしてくださいました。私たちが以前、神の怒りの子であったところが、神がキリストの血による代価を支払われることによって、私たちをご自分の養子にしてくださいました。イエス様は、神の御子です。神の独り子であられ、永遠の昔からその関係は変わっていません。神の御子は神ご自身であられます。

けれども、イエス様は復活された後に、マグダラのマリヤに対してこのように語ってくださいました。「わたしの兄弟たちのところに行って、『わたしは、わたしの父であり、あなたがたの父である方、わたしの神であり、あなたがたの神である方のもとに上る』と伝えなさい。」(ヨハネ 20:17) イエス様が父なる神と持っておられるその関係を、ご自分によって贖われた者たちをも招き入れてくださいました。

15 あなたがたは、人を再び恐怖に陥れる、奴隷の霊を受けたのではなく、子とする御霊を受けたのです。この御霊によって、私たちは「アバ、父」と叫びます。

御霊が初めにしてくださったのは、私たちが神を自分の父として親しく呼ぶことができるようにしてくださったことです。「アバ」というのはアラム語で子供がお父さんを親しく呼ぶ時の言葉です。ヘブライ語でも同じで、イスラエルに行くとき小さな子がお父さんを見て、「アバ」と言っている姿を見かけます。「パパ」とか、「お父さん」というのと同じです。

全知全能の神をどうして、父として仰ぐことができるのでしょうか？そこには、御霊の働きがあります。初めに「人を再び恐怖に陥れるような、奴隷の霊」とあります。これは、罪の奴隷、律法の奴隷ということです。罪によって死がもたらされます。そして律法は違反すれば死ななければいけません。したがって、人々を恐怖に陥れるということです。しかし、キリストはその恐怖から私たちを救い出してくださいました(ヘブル 2:14-15)。私たちは、漠然とした恐れを持っていますね。自分の命に対する不安や恐れがあり、その根本には、自分は神から離れていること、そして死んで、永遠に引き離されるという恐れがあるからです。しかし、キリストがそこから私たちを解放してくださいました。私たち自身が、親しく聖なる神を「お父さん」と呼ぶことができるようにしてくださった、その関係を与えてくださいました。私たちがそこまで主と親しく交わることができます。

16 御霊ご自身が、私たちの霊とともに、私たちが神の子どもであることを証してくださいます。

神の子どもであるであると、確かにさせてくださる働きは御霊がしてくださいます。エレミヤ書の預言には、主は、律法が心に書き記されると仰せになられたあとに、「31:34 彼らはもはや、それぞれ隣人に、あるいはそれぞれ兄弟に、『【主】を知れ』と言って教えることはない。彼らがみな、自分の低い者から高い者まで、わたしを知るようになるからだ (31:34)」と言われました。御霊が証ししてくださるからです。そして、その証しを知ることができるのは、「私たちの霊」です。自分の知性や思いを超えています。自分の感情をも超えています。確かに、自分は神の子どもなのだという確信と確認は、自分の霊によって知ることができます。そして次から、終わりの日に関わる話になっていきます。

17 子どもであるなら、相続人でもあります。私たちはキリストと、栄光をともに受けるために苦難をともにしているのですから、神の相続人であり、キリストとともに共同相続人なのです。

そして神の子どもであることは、その親密さだけではありません。神が父ですから、その相続者になることも意味しています。イエス様は、父からのものを受け、その全ての祝福を受けておられました。その全ての良き物を、キリストの内にあるということで私たちも受け継ぐことができるようにしてくださいました。「1ペテロ 1:41:4 また、朽ちることも、汚れることも、消えて行くこともない資産

を受け継ぐようにしてくださいました。これらは、あなたがたのために天に蓄えられています。」そして、主が戻って来られる時に、キリストのところへいっさいのものが集められ、その御国を受け継ぐようにしてくださいます。「時が満ちて計画が実行に移され、天にあるものも地にあるものも、一切のものが、キリストにあって、一つに集められることです。またキリストにあって、私たちは御国を受け継ぐ者となりました。(エペソ 1:10-11)」

私たちに、かつてアダムが受け継いだような所有権を神は取り戻してくださいます。アダムは、自分が造られた時に、地に生きている物を支配するように命じられました。そしてエデンの園に置かれて、そこで自分の好きなように木から実るものを食べ、また土地を耕すこともしました。そのエデンの園は、イランの辺りからアフリカに至るまでですから、日本列島よりも広範囲の地域です。そして、連れてこられる動物には、彼は名前を付けました。このように、地上にあるものを支配し、管理し、そこにあるものを楽しむことができるようにされました。けれどもアダムは後に、神の命令に反して善悪の木の実を取って食べて、罪を犯しました。そのために、彼はこれら神からの分け前を失ってしまったのです。

しかしそこから、人間に神はご自分のものを受け継がせるべく、人を救う、贖い働きを始められました。神はアブラハムを召し出し、彼をカナンの地に移し、そこを所有すると約束されました。そしてイスラエルの子孫がその地域一帯を支配するように召していただき、そしてなんと新約において、キリストにある異邦人である私たちも、世界を支配するように回復してくださるのです。これが、ここでパウロが話していることです。

そしてここで、「キリストとともに共同相続人なのです」とあります。「共同相続人」という意味は、土地を相続するのであれば、同じ面積の土地を相続するということです。同じものを受け継ぐということです。つまり、キリストが父から相続されるものを私たちにも等しく分かち合うということであり、キリストは父なる神と一つになっておられ、父のものをこの方が全て受け取り、そして私たちの中で長子にもなったださって、兄弟としてその父のものを分かち合うということです。私たちも、キリストにあって、神の国を受けるのです。御国においてはキリストが王となっておられますが、私たちも共に統べ治めます。「黙示 3:21 勝利を得る者を、わたしとともにわたしの座に着かせる。それは、わたしが勝利を得て、わたしの父とともに父の御座に着いたのと同じである。」

しかしここに、その栄光を受ける、尊厳を受けるための過程が書かれています。「私たちはキリストと、栄光をともに受けるために苦難をともにしている」とあります。私たちがキリストに結ばれた者、キリストにある者となっているということは、この方と同じようになるということでもあります。まずキリストは、ご自分が苦しまれた後に、栄光を受けられました。(ピリピ 2:8-10)これと同じように、私たちもキリストの苦しみにあずかり、それから神の栄光にあずかります。「3:9-11 キリストの中にある者と認められ、律法による自分の義ではなくて、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に

基づいて、神から与えられる義を持つことができる、という望みがあるからです。私は、キリストとその復活の力を知り、またキリストの苦しみにあずかることも知って、キリストの死と同じ状態になり、どうにかして、死者の中からの復活に達したいのです。」そしてこの後に、「キリストにおいて上に召してくださる神の栄冠」と書いてあります。

私たちはどのようにして、その苦しみにあずかるのでしょうか？イエス様は、「柔和な者は幸いです。その人は地を相続するからです。(マタイ 5:5)」と言われました。主は、ご自分が正しい方であるにも関わらず、それを受け入れない者、拒み、迫害する者に仕返しをなさらず、その苦しみを甘受されました。私たちは、この方に従えば、自分の肉体に弱さがある時も、それでも神の御心に自分をゆだねる。また誰かに悪いことをされても、それでも主に裁きを任せて、その人に憐れみを求める。このようにして生きていく時に、主はその柔和さから多くのものを相続させるようにしてください。そして、ここから 8 章の最後までに、キリスト者が受ける苦しみや迫害に対する神の御心をパウロは取り扱います。

2A 栄光のための苦しみ 18-25

1B 被造物の呻き 18-22

18 今の時の苦難は、やがて私たちに啓示される栄光に比べれば、取るに足りないと思はれます。

ここで大切なのは、「取るに足りない」という言葉です。私たちは今の時にクリスチャンであるがゆえに、いろいろな苦しみを通らなければいけません。将来に啓示される栄光に比べれば、ちりあぐたにすぎない、ということです。彼は第二コリントで、こう言っています。「私たちの一時の軽い苦難は、それとは比べものにならないほど重い永遠の栄光を、私たちにもたらずのです。(4:17)」もともと「栄光」には「重い」という意味があります。天秤で今の患難と後の栄光を比べると、すぐに後の栄光のほうの皿が下がる、ということです。

パウロは、今の患難は軽いと言っていますが、彼が受けた患難は並大抵のものではありません。彼は、同じ第二コリント書で、自分が受けた苦難について明かしています。11 章 23 節からです。「彼らはキリストのしもべですか。私は狂気したように言いますが、私は彼ら以上にそうです。労苦したことはずっと多く、牢に入れられたこともずっと多く、むち打たれたことははるかに多く、死に直面したこともたびたびありました。ユダヤ人から四十に一つ足りないむちを受けたことが五度、ローマ人にむちで打たれたことが三度、石で打たれたことが一度、難船したことが三度、一昼夜、海上を漂ったこともあります。何度も旅をし、川の難、盗賊の難、同胞から受ける難、異邦人から受ける難、町での難、荒野での難、海上の難、偽兄弟による難にあい、労し苦しみ、たびたび眠らずに過ごし、飢え渴き、しばしば食べ物もなく、寒さの中に裸でいたこともありました。ほかにもいろいろなことがあります。さらに、日々私に重荷となっている、すべての教会への心づかいがありま

す。(11:23-28)「これらは軽い患難なのです。なぜでしょうか？それは、彼が、将来の栄光の重さと、今の苦しみを比べているからです。

パウロの手紙を読むと、そこには喜びと愛と平安が特徴になっていて、自分がいかに苦しんでいるかについては、あまり言及されていません。コリント人に、今読んだところを話すときも、非常にためらって、強いられるようにして語っています。なぜ、パウロは、ひどい取り扱いを受けているなかで、そのようにできたのでしょうか？それは、彼には、後に来る栄光がどのようなものであるかが、はっきり見えていたのです。自分が受け継ぐ神の御国が、いかにすぐれたものかを、聖書から知っていたのです。ここにキリスト者の苦しみに対する忍従、希望と喜びをもって耐え忍ぶ力があります。

19 被造物は切実な思いで、神の子どもたちが現れるのを待ち望んでいます。20 被造物が虚無に服したのは、自分の意志からではなく、服従させた方によるものなので、彼らには望みがあるのです。21 被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由にあずかります。22 私たちは知っています。被造物のすべては、今に至るまで、ともにうめき、ともに産みの苦しみをしています。

ここには、神の子どもとして栄光の姿に変えられ、キリストにあってこの世界を共に相続する時に、この世界、被造物自体も元の、神の意図された状態に回復することを意味しています。「神の子どもたちの現われ」というのは、キリストによって栄光の姿に変えられ、それからキリストと共に栄光をもって地上に戻ってくることを意味しています。「あなたがたのいのちであるキリストが現れると、そのときあなたがたも、キリストとともに栄光のうちに現れます。(コロサイ 3:4)」

そして、栄光の体をもってキリストと共に現れることを、なぜ被造物が切実な思いで待ち望んでいるのか？それは、栄光の姿から人が落ちた時に、被造物も神の意図された理想の姿から落ちてしまったからです。アダムが罪を犯したときのことに起こりました。主なる神は、アダムに、「大地は、あなたのゆえにのろわれる。あなたは一生の間、苦しんでそこから食を得ることになる。(創世 3:17)」といわれました。自然界が呪われてしまったのです。そのため、地震や火山などがあり、また、動物の間には弱肉強食があります。神は、もともと、そのようには天地を造られませんでした。

けれども、望みがあります。人間が罪を犯して被造物が呪われたように、人間が贖われると土地も贖われるからです。その様子を垣間見ることができるのは、例えばイザヤ書 11 章 6 節からです。「狼は子羊とともに宿り、豹は子やぎとともに伏し、子牛、若獅子、肥えた家畜がともにいて、小さな子どもがこれを追って行く。雌牛と熊は草をはみ、その子たちはともに伏し、獅子も牛のように藁を食う。乳飲み子はコブラの穴の上で戯れ、乳離れした子は、まむしの巣に手を伸ばす。わたしの聖なる山のどこにおいても、これらは害を加えず、滅ぼさない。【主】を知ることが、海をおお

う水のように地に満ちるからである。(11:6-9)」

それで、私たちがこの肉体の中において、その中で呻いているのですが、被造物も呻いています。「産みの苦しみ」とありますが、主は終わりの日についてこの言葉を使われました。「民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、あちこちで地震があり、飢饉も起こるからです。これらのことは産みの苦しみの始まりです。(マルコ 13:8)」子どもが産まれることは、とても喜ばしいことです。けれども、子どもを産むときに、陣痛が起こります。出産が近づけば近づくほど、陣痛の間隔は短くなり、さらに痛みが増します。出産直前に、その痛みは極みに達しますが、子どもが産まれたのを見て、そのすべての痛みを忘れさせるほどの喜びに包まれます。この被造物全体もそのようなものなのです。大地震が起こり地盤もうめいているのです。これがもっともっと破壊されていきます。けれども、私たちは、この世が破壊へ向かえば向かうほど、この出産が間近になっていることを知るので、この希望をもって生きることができます。

2B 体の贖いの望み 23-25

23 それだけでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、子にさせていただくこと、すなわち、私たちのからだを贖われることを待ち望みながら、心の中でうめいています。

私たちのことが、「御霊の初穂」と表現されていますが、これは、私たちが御霊によって新たに生まれたからです。けれども、それはあくまでも初穂の働きしかしておりません。終わりの時には、御霊は被造物全体に働きかけ、すべてを変えてくださいます。

そして、被造物だけではなく、私たち自身の心の中でもうめいています。なぜなら、私たちのからだはまだ贖われておらず、アダムから引き継いだ死んだからだを引きずりながら歩いているからです。神の子どもにくださったのですが、その栄光の体をもって初めて神の子どもになったと言えます。けれども、まだそれが来ていないので呻いています。

私たちのからだは、神によって造られたものなのです。ばらしい反面、とても不便であります。このからだは、いつか朽ちて、ちりとなり、土に帰ります。病を持ち、老いて、自分の思うように動かなくなります。そして、私たちのからだは不便なのは、何よりも罪の性質を持っているからです。私たちの贖われた霊は、地上のものであるこのからだの中において、不便を感じています。神の律法を行ないたいと願っているのに、からだに罪の原理があって、したいことをしないようにさせているからです。だから、私たちもうめっていて、このからだを変えられるのを待ち望んでいるのです。

パウロは、コリント人への第二の手紙において、今のからだと、後に与えられるからだの違いについて話しています。第二コリント書五章です。「私たちの住まいである地上の幕屋がこわれても、神の下さる建物があることを、私たちは知っています。それは、人の手によらない、天にある永遠

の家です。私たちはこの幕屋にあつてうめき、この天から与えられる住まいを着たいと望んでいます。それを着たなら、私たちは裸の状態になることはないからです。(5:1-3)私たちの今の体を、地上の幕屋、テントになぞらえています。そして、天から与えられる体を、神の家になぞらえています。テント生活が、とりあえずは生活できるから必要なのですが、そこでずっと住みたいとは願いません。建物の中に定住したいと願います。同じように、私たちも、新しいからだを与えられて、正真正銘の神の子どもとなり、キリストのようになり、神の栄光を反映したいと願います。今のからは、一時的なものとしてみなし、うめいているのです。

24 私たちは、この望みとともに救われたのです。目に見える望みは望みではありません。目で見ているものを、だれが望むでしょうか。25 私たちはまだ見ていないものを望んでいるのですから、忍耐して待ち望みます。

私たちクリスチャンは、キリストが自分の罪のために十字架につけられ、よみがえられたことを信じることによって救われました。けれども、からだの贖いがあつて初めて救いが完成するのであり、私たちは、将来にからだを贖われることを望まずして生きていくことはできません。主が私たちのために再び来られます。そのときに、私たちは引き上げられて、一瞬のうちに変えられて、新しいからだを身にまとい、主と対面するのです。

そして大事なことが書かれていますね。「目に見える望みは望みではありません。目で見ているものを、だれが望むでしょうか。」ある人は、人は水なしで一日生きられる、そして空気がなくても一分間、生きられる。望みがなければ一秒も生きられない。私たちは期待し、待ち望みながら生きている者たちです。その望みが私たちを支え、救っています。そして望みは、目に見えるものではありません。大事ですね、目に見えなくても信じるのです。待っているのです。熱心に待っています。主を来てください、と私たちは祈り、また賛美します。

3A 御霊の執り成し 26-27

そして、その呻きの過程の中で助けてくださる方がおられます。私たちを神の子どもにしてください、神の御霊ご自身です。

26 同じように御霊も、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、何をどう祈ったらよいか分からないのですが、御霊ご自身が、ことばにならないうめきをもって、とりなしてくださるのです。

神の御霊が、「同じようにし」助けてくださると言っていますが、何ををもって同じようにして、なのかと言いますと、私たちは「この望みとともに救われた」と24節に書かれています。私たちの体が贖われて、神の子どもとして現れるという望みがあり、その望みによって私たちは今を生きることが出来ます。けれども、その望みが実現するまで、この弱い肉体の中にも、呻きの中で助

けてくださる、ということです。

私たちの弱さは、どこに現れるかと言いますと、「何をどう祈ったらよいか分からない」というところに現われます。神が、いま置かれている状況の中で、特に苦しみの中で、何を御心としておられるのか、どう祈ったらよいのかが分からないという弱さがあります。「1ヨハネ 5:14 何事でも神のみこころにしたがって願うなら、神は聞いてくださるということ、これこそ神に対して私たちが抱いている確信です。」とあります。主の御心がこの地上で行われることこそ、私たちの祈りを神が聞かれる理由であります。けれども、その過程において主が何を行なわれているかが分からないという呻きがあるのです。どう祈ればよいのか、分からないという呻きです。例えば、ヨセフのことを思い出しましょう。彼は兄に売られてエジプトで奴隷となりました。そして、ポティファルの妻に言い寄られました。それを拒みました。拒んだことは御心だったのです。ところが、そのことによって彼は牢屋に入れられました。そして牢屋の中にいたパロの献酌官長に自分が出獄できるよう頼んでも、彼は二年間、忘れてしまったのです。

そこで御霊が助けくださるのは、「ことばにならないうめき」ということです。私たちが心の中で、言いようもない深い呻きがあります。そのような呻きの中で、私たちの内に住まわれる御霊が助けくださり、それで私たちのために父なる神に対して執り成していただき続けている、ということです。

その最も良い例として、サムエルの母、ハンナの祈りがあります。時は、士師の時代です。一人一人が、自分にとって正しいと思うことを行なっていて、もう滅茶苦茶でした。そこで、主は靈的に回復させるべく、預言者を立てようとお考えになっていました。そこで、「主がハンナの胎を閉じておられた(1サムエル 1:5)」という言葉があります。まるで、もう一人の妻ペニンナのいじめと一緒に、主がハンナをいじめているかのように見えます！しかし、ハンナは主の宮に行き、自分の心のうちを神に打ち明けました。ところが、うまく言葉になっていません。それでそれを見ていた、祭司エリがこう言っています。「1サムエル 1:12-13 ハンナが【主】の前で長く祈っている間、エリは彼女の口もとをじっと見ていた。ハンナは心で祈っていたので、唇だけが動いて、声は聞こえなかった。それでエリは彼女が酔っているのだと思った。」こうやって、彼女は言いようもない、深いうめきを持っていました。

ところが彼女はこう祈ります。「1サムエル 1:11 そして誓願を立てて言った。「万軍の【主】よ。もし、あなたがはしための苦しみをご覧になり、私を心に留め、このはしめを忘れず、男の子を下さるなら、私はその子を一生の間、【主】にお渡しします。そしてその子の頭にかみそりを当てません。」」ハンナの心が、主の御心に近づき、その心を持って祈ったのです。主のすべてを捧げた子を育てることに、彼女はしました。こうやってサムエルが生まれ、サムエルは幼少の頃から幕屋で育ち、そして神の言葉が与えられ、イスラエルを主に立ち返るのに用いられた器となっていきます。

27 人間の心を探る方は、御霊の思いが何であるかを知っておられます。なぜなら、御霊は神のみこころにしたがって、聖徒たちのためにとりなして下さるからです。

今見ました、ハンナのように、御霊が御心にそって聖徒たちのために執り成しをしてくださいます。私たちがうめきをもって祈っている時、御心が分からないで言葉にもならないとき、実は御霊が、神の御心にそって執り成して下さるのです。

4A 父なる神のご計画 28-30

こうやって、神は御霊によって、今、呻いている私たちを助けてくださいます。希望によって支え、また御霊の執り成しによって支えてくださいます。そして神が、ご自分の計画によって、その御心を必ず果たして下さることを次に見ます。

1B 全てを益とされる方 28

28 神を愛する人たち、すなわち、神のご計画にしたがって召された人たちのためには、すべてのことがともに働いて益となることを、私たちは知っています。

この約束は有名ですが、先ほど紹介したヨセフの生涯において、このことが如実に表れていました。兄が私を売ったという悪を、彼は神のご計画の中で益とされていたことを知りました。そして、そのことに基づいてヨセフは兄たちを心から赦していました。「あなたがたは私に悪を謀りましたが、神はそれを、良いことのための計らいとしてくださいました。それは今日のように、多くの人が生かされるためだったのです。(創世 50:20)」この箇所について、一つ一つ見ていきたいと思います。

英語でこの箇所を読むと、“We know”から始まります。つまり、「私たちは知っています」から始まるのですが、ギリシヤ語には「知る」には二つの単語があります。一つは、経験的に知っていることです。自分が経験しているので知っています。そしてもう一つは、直感で知っていることです。経験はしていないけれども、「確かにこのとおりだ」と直感で分かっているのです。この箇所では、後者が使われています。つまり直感で知っているのです。「神がすべてのことを働かせて益としてくださる」ことを、私たちはもちろんのこと体験することはできません。すべてのことが善であるはずがありません。ヨセフが、兄たちが行なったことについて、「あなたがたは、私に悪を計りました」と言ったように、悪いことは悪いのです。

ですから、キリスト者はくさいものに蓋をするように、悪いものに目を留めないではありません。悪は悪なのです。けれども、人間はそこで「悪が重なり合って、災いが自分に降りかかる」と推測するのです。けれども、私たちは知っているのです。「これらの悪も、神のご計画の中で、善の目的のために使われていくだろう。」と。

けれども神が、すべてのことを働かせて益あるいは善としてくださることは、全ての人に与えられている特権ではありません。「神を愛する人々」です。神を愛して、神に心が開かれているからこそ、万事が働き益となっていくことを知ることができます。何か悪いことが起こると、神に心を閉ざしている人は神を非難します。「なぜこのような悪いことを神は起こすのか？」そして「神がしていることは分からない」と疑います。けれども、神は無理やり口をこじ開けて、ご自分を受け入れるようにすることはなさらないのです。神は、私たちが自分の心を開いた分だけ、ご自分の愛を注いでくださいます。ですから私たちのほうが、神に大きく心を開いていないといけないのです。

そして、どのようにしたら神を愛せるのでしょうか？「神のご計画に従って召された人々」とあります。ヨハネ第一には、「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し(4:10)」とあります。まず、神が一方向的に私たちを愛して、私たちをキリストにあって選んでくださったからこそ、私たちは神を愛することができます。「召された」というのは、神の子供になるように呼ばれた、ということです。神が私たちを、孤児院から自分の養子にするために選び出してくださったのです。この神の愛に応答する者たちが神を愛しており、神を愛している者に神は万事を益とするという働きをしてくださるのです。

そして忘れてはいけないことは、「すべてのことを働かせて」であります。一部ではなく、全てです。神の主権からはみ出している物など何一つないのです。ダニエル書 2 章に、「2:21 神は季節と時を変え、王を廃し、王を立てる。」とあります。どんなに権力をもった支配者であっても、その支配者を動かしておられるのは神ご自身なのです。どんなに、神を脱しているかのような人がいても、その人が神の支配から離れているところか、神に操られている人形にしか過ぎないのです。

2B 御子の形 29-30

29 神は、あらかじめ知っている人たちを、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたのです。それは、多くの兄弟たちの中で御子が長子となるためです。

パウロは、すべてのことを益に変えてくださる、と言いましたが、それは、御子と同じ姿に私たちが変えられることにおいて、そうである、と言っています。私たちがイエスキリストの姿にますます似てくるように、神は、すべてのことが働かせてくださいます。ですから、益となると言っても、私たちがお金持ちになるとか、あるいは良い結婚相手に恵まれるとか、学問やスポーツにたける、とか言うものではありません。ちょうどヨセフが、兄たちを最後に赦すというキリストの似姿がそこにはありました。同じように、あらゆることを通して主は私たちを御子の似姿に変えてくださいます。

そして御子が私たちの長子となる、とあります。私たちが神の子供とされたので、もちろん御子と父なる神との関係と、私たちと父なる神はまったく異なりますが、(御子は神ご自身で、私たちは単なる人間ですから)、それでも、神がキリストに対して与えてあるものを、キリストにあって私たち

に与えてくださっています。それでイエス様は私たちを兄弟と呼んで憚らなかったのです。「ヘブル 2:11-12 聖とする方も、聖とされる者たちも、みな一人の方から出ています。それゆえ、イエスは彼らを兄弟と呼ぶことを恥とせず、こう言われます。「わたしは、あなたの御名を兄弟たちに語り告げ、会衆の中であなたを賛美しよう。」」

これが、栄化であります。父なる神と御子の中にあるその関係を、私たちにも押し流してくださる働きが、「長子」という言葉に含まれます。ですから、キリストの内にある者は、キリストがおられるところに、私たちも立たせられるという恵みの特権を持っているということを知るべきです。

30 神は、あらかじめ定めた人たちをさらに召し、召した人たちをさらに義と認め、義と認めた人たちにはさらに栄光をお与えになりました。

ここですばらしいのは、神が「栄光をお与えになりました」と、過去形で書かれていることです。私たちにとっては、栄光の姿に変えられるのは未来なのですが、時間を超えたところにおられる永遠の神は、キリストにある私たちを見るときに、すでに栄光の姿に変えられているのです。これほど私たちを安心させることはありません。私たちがキリストのうちにいるかぎり、神は私たちを決してお見捨てにはならないのです。神は確実に、救いの働きを貫徹されます。永遠の保障です。

神が予め定めておられて、それで「召す」という働きを初めに行われます。これは、キリストを信じるように召される、ということです。まずここから始まります。神が行われたキリストの贖いの働き、その救いの言葉に応答するように呼びかけられるのです。その呼びかけに応えることが「信じる」ということであります。そして、信じた者を、神は、「義と認められる」ことをなさいます。神の前に、キリストの犠牲があつて正しいと宣言されています。そして「栄光」は、先ほどの体の贖いであり、神の子供の現れのことです。キリストとの共同相続人となることです。このように、神は栄化されるまでの期間に対して、すべて責任を持っておられます。だからこそ、次から始まる、私たちに対する神の愛は、どんなことがあっても切り離すことはできないのです。